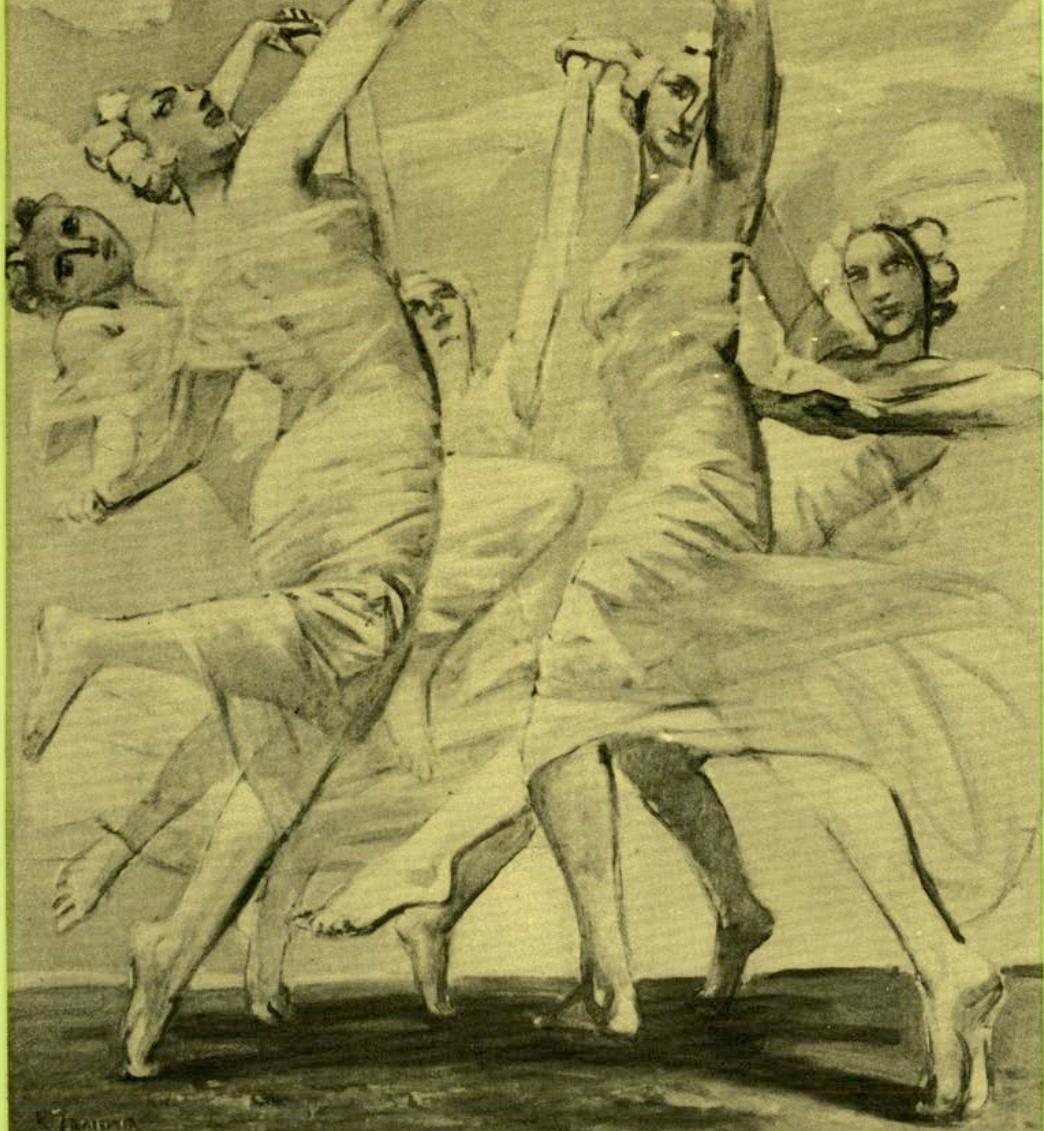


郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子



11月号

MONTHLY MAGAZINE KOBEKKO NOVEMBER 1961 NO. 8



暖かいムードただよう
あなたの冬

大阪ガス



快い暖かさがお部屋いっぱいに
ひろがる／暖かさはあなた自身
のもの／それはガストーブの
あるあなたのお部屋のひととき

OSAKA GAS
ガストーブ

正価1,800円から・3カ月払1,900円から

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたの暮らしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です



神戸の女性



Hino コンテッサ

神戸日野自動車

TEL④5771~5



神戸の新名所・トーテム・ポールとコンテッサ



目 次

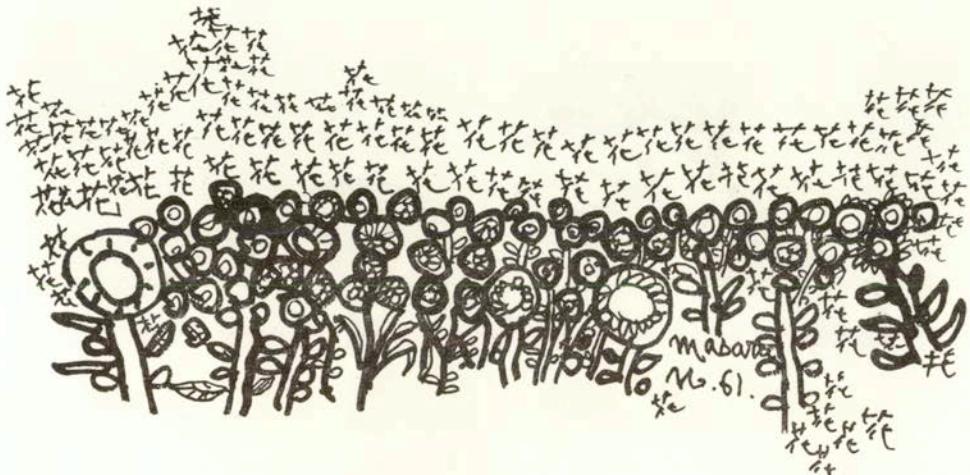
PHOTO／神戸の女性・杉尾友士郎	1	28 近づいたクリスマス・福富芳美
連載隨想5／清憂・阪本勝	4	30 クリスマス・プレゼント案内
連載第8回・ここに神戸がある 須磨・司馬遼太郎	8	34 座談会／世界のレジャータイム
神戸っ子交歓・神戸二中同窓生	12	39 KOBEKKO SHOPPING GUIDE
神戸だからえがく夢 NO1／藤本義一	16	42 特集／神戸の鉄板料理あれこれ
ずいそう／須磨デー・永井叔	18	47 ずいそう三題 青木重雄・長谷川六郎・水野一二三
花時計・レリーフ／松井高男・伊藤誠	22	50 1店紹介／神戸屋
映画戯評／小早川家の秋・名村喜久江	24	51 読者サロン・表紙の言葉

表紙／田村孝之介・カット／中西勝・カメラ／杉尾友士郎・米田定蔵・デザイン／橘昭三

れんさい／隨想⑤

清憂

阪本
え・中
西
勝 勝



都會には都會の相がある。とくに港都と呼ばれるものには、かくべつむつかしい相がある。

日本国中でいちばんすぐれた相を持っている港都は神戸市だ。このことはすでに何べんも人に話したし、文章に書いたこともある。

ところでこの“相”といういさきか神秘な感覚について最初わたしに教えてくれた人は、誰であろう、原口神戸市長である。

いまから幾年かまえ、神戸市が現在の東灘区や、明石郡、有馬町などの合併のために全力を傾倒していたころの話しー市長は中井一夫さん、助役のひとりは原口さんだった。そのとき原口さんはわたしにしみじみ言ったことがある。

「阪本君、神戸港に船がはいつてくるとき、内外人を問わず、一樣に感することは、ああ神戸という港はいい港だ、美しい港だということだ。昼は山を背景とする世

界にまれな美観があるし、夜は山の斜面に点々とともる
夢のような灯の眺がある。これこそ言葉には表現しがた
い神戸港の相の良さというものなんだよ……」

わたしはこの言葉に感心しながらこんな事を言った。
「原口さん、そりやそりやと思うけれども、あん
たが知らないことが一つある。それは神戸港にも劣らぬ
良い相を持っているのは、あんたのデッカイ耳だよ……」
そしてふたりは愉快に笑った。



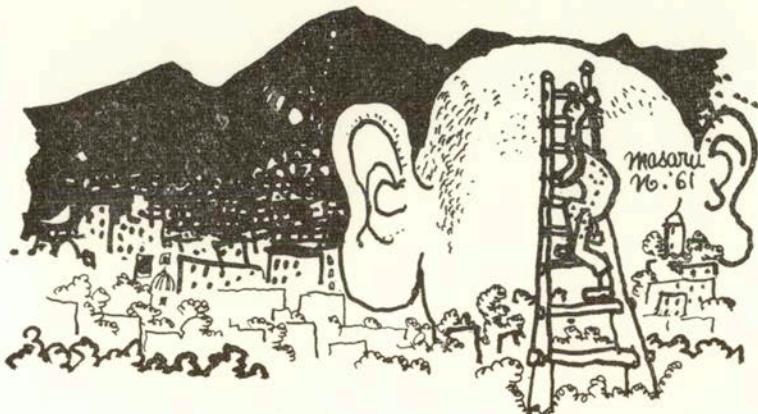
ことしの七月のなかばから八月末にかけて、わたし
はひとりむすめの小弓をつれて、久しぶりに欧洲をひと
まわりしてきた。三べんめの旅だから、わたし自身には
つきなみの見物なんかいっこう興味はない。パリのエッ
フェル塔に行ったときも、わたしは頂上にのぼらず、む
すめだけに塔上からの觀光の愉しみを満喫させ、わたし
は約一時間塔下でぶらぶらしながら、あらためてこの塔
の構造を見なおした。一八八九年にエッフェル技師によ
つて建てられたこの塔の、ああ、何という美事な構成よ
具象よ、力学よ！そしてまた周辺との調和に深い叡知と
良心をそそいだシンメトリカルな構想よ。

始めて東京を訪れる外人たちから「ああ、あれが日本人の民度か」と冷評悪罵される東京タワーに対する屈辱
感と憤激が、胸中にたぎりたつのをおぼえた。

橋脚の一つを芝増上寺の境内に入れ 塔下にはあやし
げなビルが建っている。どこに帝都の美観とか周辺との
調和に対する考慮が払われているのか。ボス、ボス、ボ
ス……私利と貪欲のるっぽのなかにのたうちまわる亡者た
ちが祖国に与えた屈辱のほかに、いつたいあれが何を意味するのだ。



ここで話が三転する。歐州から帰神して直後、わたし
はつぎのような耳よりな話をきいた。神戸のいわゆる中
突堤に、ある種の高塔を建てる計画が進んでいくとい
うのだ。外遊中に熟した企画だから、わたしが具体的な内
容



を知らなかつたのはやむは得ないと考えたものの、心配のあまりさつそく原口市長を訪ね、その構想をきいてみた。市長は主管の局長からわたしに何の連絡もなかつたことを知り、すみやかに局長よりわたしに説明させることを約してくれた。これはきわめて正直で公正な態度であった。

それから一両日後、局長らふたりから詳しい説明をきく機会を得た。わたしの心配は、神戸港の玄関に醜悪な高塔を建て、相の良さにおいて世界一をほこるわが神戸港の美観がけがされるようなことがあってはたいへんだという点にあつたわけだ。エッフェル塔や東京タワーのことをあれこれ思い、真に神戸を愛する市民のひとりとして心のうづく思いがしたのであつた。

しかし説明をきいて、わたしの心配は可なりうすらいだことをここに正直に書きしるしておく。だが鼓型の百メートルの高塔があつこにそびえ、煌々たるネオンの光が神戸の夜空をてらすことが、神戸市の美観にどのような影響をおよぼすかは、現実を見てからではないと適格に判断できないだろう。しかしそくなくとも想像できることは、大阪の通天閣にはば等しい高さの高塔が港の正面玄関にそそりたち、ネオンの妖光が夜空を焼くとき、神戸がほこる山腹のなつかしい港の灯は、高塔の威圧のまえに、はかなく、わびしいものになりはてるだろう。

わたしは計画そのものを決して非難していない。大貿易港として宣伝上必要な面は多々あることだろう。ただわたしがひたすら望むことは、今後この計画を進行させる多くの人々が、どこまでも神戸を愛するという真剣な郷土愛にたって、市民を失望させたり、憤激させたりするような結果とならないよう、かくだんの努力をしてほしいという事だ。わたしは今日まで、いろいろの機会に言い、かつ書いた——「世界中でいちばん好きな都会は神戸だ。オレは神戸で生き神戸で死ぬ覚悟なんだ」と。のぞむらくはわれを愚人といいたもうながれ。古人いわざや「田夫清憂を抱く」と。

(兵庫県知事)

FUGETSUDO

65年の伝統・新栗の
マロン・グラッセ



銘菓ゴーフル 御婚礼用引菓子

創業 明治三十年



風月堂

神戸・元町三 TEL. 神戸 ③ 695・696



きものさらん
服飾細貨

西店
東店
新橋店

東京
神戸



ちんざら庵

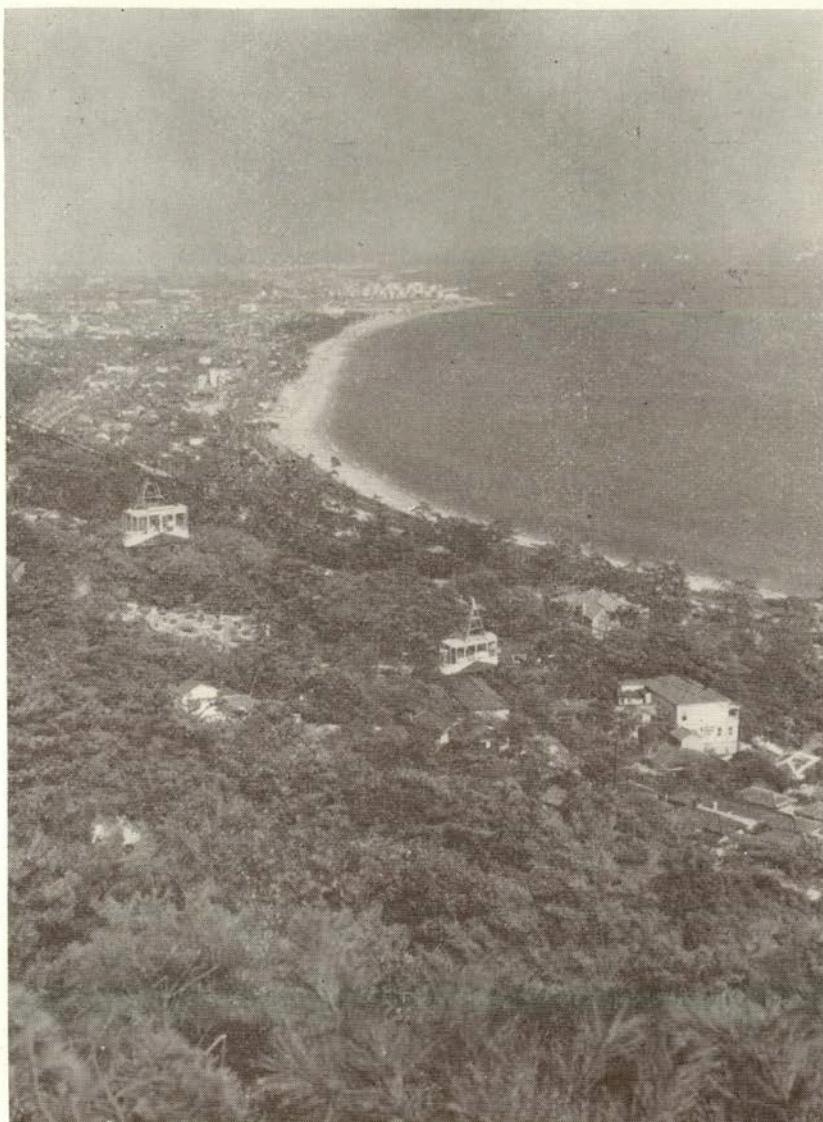
神戸・西宮店 TEL ③ 8836
東京・新橋店 ③ 0629
(571) 0807

連載 第8回

ここに神戸がある

司馬遼太郎
え 中 西 勝

(鉢伏山よりのぞむ名勝須磨の浦・写真山陽電鉄提供)



須磨



神戸という土地は、たとえば京都のような観光資源も少なく、また京都ふうの対観光感覚もない。袖戸における奈良・京都式の観光資源といえば、なんといっても須磨である。いや、須磨であろうと考へていた。

そこには、源平合戦の歴史があり、古寺須磨寺がある。当然、神戸のひとはそれを愛惜し、それに執拗な愛情をもち、保存し、宣伝しているのだろうと思つていて。

とは、大きな見込みちがいだった。神戸のひとは、自然に歴史をくつづけて愛惜するよりも、自然に人工をくわえて、歴史とは離れたあたらしい観光資源に仕立てようという慾望のほうが、はるかにつよい。

そこに、京都や奈良とはちがつた神戸人の性格があるらしい。観光のタテフダよりも、ブルドーザーのほうが、はるかに神戸人の好みにあつてゐるといつていい。

×

×

こんどの回は、須磨へつれて行つてもらつた。

まず、鉢伏山のロープ・ウエイで山上にのぼつた。そこには山陽電鉄経営の大きな展望台ができていて。

明石海峡、大阪湾が一望にみえ、晴れた日には、紀州の友ヶ島までがみえるという。
途中、ロープ・ウエイのなかで、乗務員のお嬢さんの説明をきいた。そのうたうような語りのなかには、源平のいくさのことは、ひとことも出なかつた。
ふしきにおもつてきくと、

「夜だからです」

といった。昼間の説明では、一ノ谷の合戦のことは、口上のなかに入れるという。

神戸における「歴史」の位置がわかるような気がした。いわば市内のどまんなかにあるこの純觀光用のロープ・ウエイのなかでさえ昼間しか一ノ谷は語られない。とすれば、一ノ谷は、神戸のどこで語りつがれでいるのだろう。

×

×

「それはまあ、須磨寺の境内だけで語りつがれている程度でありますな」

と須磨寺の副住職の小池義人氏はいった。

「といって、この寺へ、それがためにわざわざ見物のために遠い所からやってくる人は、ます少ないでしよう」

もつとも、須磨寺は、寺有の土地山林の多い寺だから、観光收入を考える必要もなく、自然、京の古刹のよう観光客に物欲しげではない。つまり、寺の宣伝をあまりする必要がなささうなのである。

私は、はじめて須磨寺というものをみたが、ひどく想像とはかけはなれた寺だった。

「そうでしょう」

と小池さんは笑いながら、

「どなたも、始めて来られた方は、そうおっしゃいます。きっと奈良の郊外にあるようなものさびた古寺を想像されていたのでしよう」

堂々たるガランなのである。

しかも、どの建造物もあたらしくいかにもいきいきとしている。宗教活動をすでに停止してはるかな歴史の遺物と化してしまっている大和の古寺とは、まるでちがう。

遺物には、遺物のうつくしさがあり、古格があり、みずみずしい詩があるのだが、私の想像ではとっくのむかしにそくなっているはずの古寺須磨寺は、まるできのうきょうの新興宗教のようになまなましく息づいている。

「おそらく、ご不満でしような」

と小池氏が、微笑した。

「とんでもない」

と私はいうしかない。

寺といふものは、やつかいなもので、死物にならなければ詩がうまれない存在なのである。

坊さんの仲間では、収入のいい寺のことを「肉山（にくさん）」という。肉がたっぷりついているという意味で、たとえば、東京の浅草寺や、大阪の四天王寺は、肉山である。

しかし、浅草寺や四天王寺へ行つても、なんの詩的感興もおこらないであろう。肉山たからだ。

それよりも、布教活動の死にたえた大和の唐招提寺や秋篠寺、法



華寺などのような死山（というようなコトバはないが）に、人は美と歴史への涙をながす。妙なものだ。

須磨寺は、死山ではなく、行ってみると肉山だった。あたらしいコンクリート造りの宝物殿も建造中だったし、その背後には、やはり耐震耐火建築の納骨堂がたっていた。寺は、十分に生き、活動しているのである。それだけに詩的感興はいっこうに湧かなかつた。

「どうです。俗っぽいでしよう？」

小池さんは、いちいち、気にしていられる。しかし、寺が俗っぽくなくなろうとすれば、建ちきされの死山になるほかない。俗っぽいということは、それはそれで結構なことだし、他人が、自分なりの詩的情緒にあわないというだけのこととやかくいうべきシアイではない。

寺の宝物をみせてもらつた。

敦盛が所持していたという「青葉の笛」や、敦盛のヨロイなどがあつた。

その真偽が、郷土史家のあいだでやかましく論義されたことがあつたといふ。みせてもらうと、べつに論義するほどのこともなく、ウソであるとおもわれた。しかし、ウソはウソとして、この品々は数百年のあいだ保存され、熊谷と敦盛の哀話を持ち回ってきた。

人工がすきで、歴史のきらいなこの街で、たつた一つ、街のふるいはなしを物語りつけ、いまも物語っているものは、ロープ・ウエイの屋間の案内娘とこのウソの「青葉の笛」だけなのである。

しかも、かれらが物語るうとしても、市民は耳をかたむけようとしない。

が、笛は、須磨寺の奥で、ひとり物語りつづけている。

この笛の真偽がいざれであるにせよ、いやむしろ笛がニセモノであればそれだけに、私はこの笛の努力が、かなしく、いたいたしく尊くみえるのである。

神戸っ子は、もっと須磨寺をたいせつにしてほしいな。

（作家）